



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市社会学 : 昭和28年度特殊講義案 第6巻 第1号
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	東洋大学社会学部大学院社会学研究科講義案。
Issue Date	1953
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77400
Type	manuscript
File Information	N012_01S28.pdf



NOTE BOOK

*Made of paper
Specially prepared in Nippon*

都市社会学

二十八年度

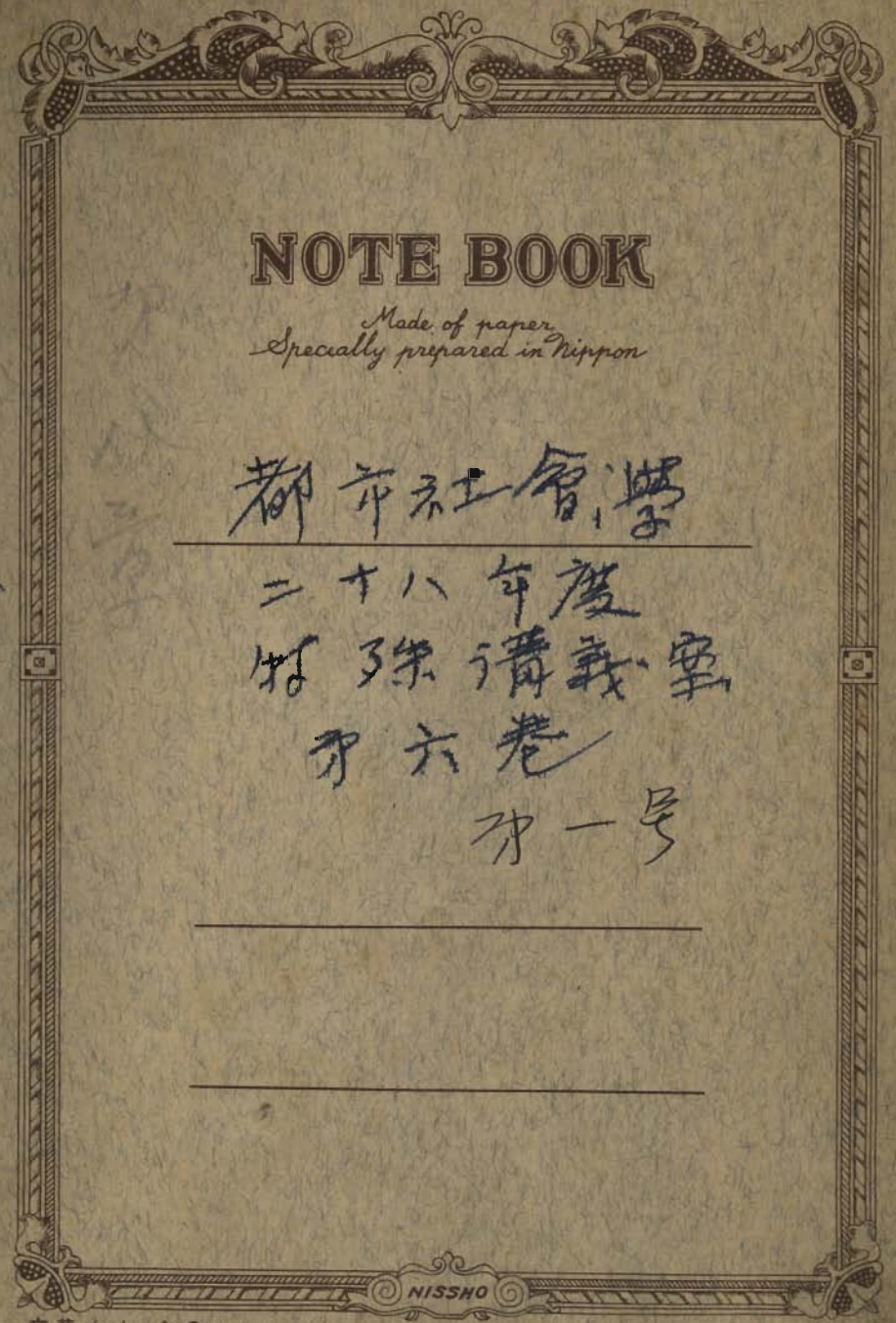
特殊讲义案

第六卷

第一号



¥30.00



NISSHO

文華ノート A 3

4
都市の独立
(都市と農村の別)

本ノートの内容

一 四市

九

二

三

四

五

六

七

八

十

都市の概念と其の発展

と其の発展

と其の発展

と其の発展

と其の発展

と其の発展

と其の発展

「以上全体として都市的実態は識別し得る
との並い不慮なよう限多を引くとは可成
であり、一万分一より大なる空中浮床がわら
わなうは比較的容易にその目的を達成
し得よう」木内 R.71

9. 住宅と職場

前項において余は都市集落の外周に於ける
路傍の一軒家に居住する人の場合を取り扱
して置た。然るは市内に於ける親戚、友人、知人
を有し、都心のオフィスに近しい生活態度や
娯樂散歩に都市より遠く居る。彼は明
らかに都市の生活協同体になして居る。
故に都市そのものの空間的区画が如何に区画
し居るにせよ、どんな一軒家であろうと彼は
都市の市民である。
然し然し彼の居住が都市集落より遠くは
居る。それは認め、かつ、それは彼の居住

のち、岩ねに他の町へ行く。近接して、
とすれば、同様に別である。

彼の住居の^{附近}を過す道路は、岩ねの町と都

市町を過す道路である。これは都心

に近接するバスや電車の停車場と岩ね

の町へある。かくの如き場合、彼らの

彼の家族が岩ねの町へ^{生活}に^{生活}に^{生活}ある。

ある。かくとも、岩ねの生活は、岩ねの手

近かに岩ねの町へある。これは、岩ねの

町へある。これは、岩ねの町へある。

う。これは、岩ねの町へある。

である。これは、岩ねの町へある。

下し、人と何もの交けも持たず、一とす。なり
は、^脚全社會的階層の^絶の^絶なり。大都
市の中央に片住しつゝ、も五志の生活、他の
市民の生活より^絶絶する機会を同じへる。
原則的に云へば、人は其の片住の最も手近か
にある夏の暮の生活協同体に移居するもので
あると云へてある。然し近代^{人生活}社会においては
職場との関係が著しく増大して、あゝ。しかし
職場と住居とはその在の可成り異なる。其の
間に愈々その傾向を著して居る。人の都市への
移居は片住に止るのみならず、職場に止る。
可なり。これ大なる傾向である。

住居とは本来寝るための構へである。家は

寝る場所、寢室が家の中核である。

（度印し書きするお鳥の

鳥籠の雛も眠るところをいふのである。）

安眠のために風雪を遮り冬は暖かく

夏は涼しく動物や人間が近づきにくい

睡中に危害を加へたり安眠妨害す

うなすものに警戒せしむ人間の必要は

住居である。

睡眠中は人は無力に近い。氏無力の回

に人が充分安全に生命や財産を守り

病害や災害、虫害、狐、鼠、賊、火

保護すべし易なる備へ

思ふ

あゝあゝか。仕事も寝る以外の
休息の時間と有り食うの場所となつたのは
第一の躰違ふであらう。仕事も眠るの
場所には同じ好むものも仕事本来の使命
とはちがふ。

今では人は衣食を衣服の野営
食物保管調理食うも行い、一々の財産
を保管し寝る外に性交の場所とし
これ同じ信仰の如き場にも娯楽の場
所にも用ゐる。妻子老病者の庇護の
場所にも用ゐる。生活の中心はこの家の内
にあり、他方には生活資料、娯楽

のみに據るに由據けり。又である。職務を
せしめし山形をかけ廻り職務を得てはそれ
くわへて仕事に忙し初めを羨み帰郷の
命令と本望に相いりて回る。生活の本
據は明かに仕事である。住居と職務を
比較する時明かに住居が生活かまへ
職務が生活か絶てある。

然し今では職務の命令により雇ひ
住居も変へなければならぬ。住居の命令
によつて職務を定むる。そして職務の都
合で住居を定むる命令は違ひが多い。
さう考へれば今では職務かまへ住居

大體である。然しにも亦つてある。

然しは市民の生活性は職場の位置によつて定むべきか、住居の位置によつて定むべきか。

都市を生活調節体と見なすは都市

の範囲は生活の本據によつて即ち住居によつて

定めらるゝである。生活の本據としては職場の

よりも住居をとらうである。職場は住居を

支配する力は大であるか、如何に大でも生活の

本據ではなつ。生活の本據が住居であるなら

は生活調節体としての都市の範囲を決定

するものは職場に非ずして住居である。

生活協同体

都市を生活協同体と見るのは前近代
的な考え（少し知れぬ。現実の都市の人は
人を同質化して取扱へず。競争原理を
支配原理とする。修羅場。都市として
云へる。それによつて都市には格差が生ず
る。また其生活が都市の外郭に飛出
てくる場合は比率に於いて余り高くない。生活
協同体といふのは、所以である。これをいふのは生活
的抵抗の統一を表現する。つまり生活
協同体、と云ふ語は、交々である。これをいふのは、
生活の団結の統一と独立を意味する。その上
いふ余り、故に生活を同質とする。

白河都市は密集した地である。其の中心部に
て其の中心部に職場と住所を合せて居るもの
である。但し一部の人は密集した地から
住民は其の中心部の外に職場に勤めて居る。
又或る少数の人は其の中心部の外に居る。
其の中心部の外に職場に勤めて居る。又或る
は金作といふのは少数の例外である。又
其の中心部の外に勤める。又或る中心部の
職場に勤めて居る。然し東京市の旧
市町の住民は其の中心部の外に勤めて居る。
其の中心部の外に勤めて居る。其の中心部の
外に勤めて居る。其の中心部の外に勤めて居る。
其の中心部の外に勤めて居る。其の中心部の
外に勤めて居る。其の中心部の外に勤めて居る。

の市民であると思ふのである。

住居が密集して居る可成、それ、都市の外形であり、生活の国連的統一を暗示する、都市の精神的な内容である。

住居の成り立ちも昔の時代とは大分異なる形にあり、大分、地形を介しなすつて居る田舎の城下町である。

然し多くの近代的都市には、その職場の漸次拡大し居るよう分業したる職場の住居地の中に割り込んでゐる、都市の核は俄かに変つて

また。職場が漸次都市を占拠
して行く形となった。既にこれは都市は
職場、又の密集地となり、ここに過剰人
の住居は附近の山郷に分散していま
いさうである。この傾向がつけば、都
市は住居の密集地となり、又も職
場の密集地となるのである。近世の都
市には多くの住宅公営アパートが職場の
近郊に附設されたが、然し最近には
事業の毎に都市の外部に社宅、
官舎、公営住宅が設置され、都市は
職場の専有地となりつつある。

三卷集和

(一)

かくて近代化の進んだ都市は次の様な形
 態となるであろう。

アパート、商店、銀行、
 多量な官庁、学校、工場

都市
 職場事務所

A 住宅地
 B 住宅地
 C 住宅地
 D 住宅地
 E 住宅地
 F 住宅地
 G 住宅地
 H 住宅地
 I 住宅地
 J 住宅地
 K 住宅地
 L 住宅地
 M 住宅地
 N 住宅地
 O 住宅地
 P 住宅地
 Q 住宅地
 R 住宅地
 S 住宅地
 T 住宅地
 U 住宅地
 V 住宅地
 W 住宅地
 X 住宅地
 Y 住宅地
 Z 住宅地

死の三途地獄

大徳の心は死に勝る

戦域おつはなへてあらうか。

100%

10 都市の概念と其具象化

都市は工業的に著しく変化し発展して
来ると、その時々同一概念を認むる事が
困難である。故に過去の都市概念の都
市と現在の都市に妥協する様な都市の
概念を規定する事は困難である。然しこ
れは都市に限らず工業的な社会的存在
の何れにもついても同様であると思はれる。
現在及びその直前の時代の都市に妥
協する。都市の概念は次の如きものと考へて
居る。

都市とは森林地帯都市以外の様な

形態的に比較的独立した

職掌人々よりなる密居的集落をなして
その上に独立した

生活共同体を形成して居る地域的集落

統一性である。

右の定義を考慮に入れて行政都市即ち

一市の地図を精讀して見よ。

是つ市の区域内より農村地帯等々人

口の住居が地域を除外されよ。市の中央

部はゆるい密度の集落であるが、その外周の

地域は住居は可成り粗大となつて居るが、

形態的に比較的独立した密居的集落

をなす大作の輪廓は是定め得る。

此輪廓の内部の人々は是こゝに独立し

生活場同僚を形成して居る。生活場
同僚とは其内の人とは相互に協力的
な活動をしその範囲を越えて他
の地域の人とは別の同僚^大として日
常の用を交し得る存在生活である。
協力を要しても特に協力を要^大
するのではなく、各自自分の利益を達
及しながら交易したり^雇傭したり競争
したりして、しかも結果に於いて互いに
協力になつて居る同僚である。つまりその
分の強みに傭けりや強かゝる必要を

思ひ流る（ら）娛樂教を習け、日本の
の體を生活の爲に他の地方に送る、
としをて果され、様々生活である。
都市の人々が相互に協力し合ふことは
そんな意味で、互に打撃し競争
し、掠奪し、強奪し、それによつて
その都市の人々の秩序あるものを造り
出す。

是の二都市の地圖に兩眼を落して見ると
（主要部をなすところ）
その二都市の密着した外、その外、其

地と見ると、大抵の輪廓を呈して居る。

それは、此の二都市の間にあり、その

外周に求け、果樹の形成は甚る明瞭を
欠いて居る。住居や工場等が断続し
四方に散在しあつては少さい。密
居地域を形成し又あつては耕地が
かゝる。此外周部に求けられ
果樹の配列。若しくは他の密居的
果樹が足る。都市の外周部は現
在も混雑して然るが年々と共に月
と共に変化して居る。此地域の人の生活
は大抵、^{中心部の}市の生活協同体に向つて
居る。若しくは町の附近では其町の生活
協同体に向つて居る。

◎人は何れかの生活圏関係に属
 しているからである。何れかの生活
 圏関係から切り離されれば人の生活
 は成り立たない。市域の問題は
 何れかの生活圏関係の
 範囲をどうするか、その決定である。二つ
 の生活圏関係を接する
 場合、都市の急激な発展
 によっておこったからである。
 人が何れかの生活圏関係にな
 ると必ずそれは一般化に導
 けよう。

その場合、生活圏関係がどれであるか、
 地図の上で示さなければならぬ。一
 般化の範囲が、スキャンライン、コン
 テーナー決定する。ある調査でも、調査
 を試みればその範囲を明らかにする。
 地図の上に線を引いて、市域を示す。
 その線の内部が何れかの市の本来の都市の
 範囲である。それは行政上の区、市、町、
 村、郡、県、国の区分、あるいは
 大いである。

生活圏関係への関係の図は、行政上の区、
 市、町、村、郡、県、国の区分、あるいは
 大いである。

おつか、^{戸多}洞也によ、^{人の住所}しるの所を、知、うは
あま、あま人所、^{の人の住所}所を、^同同の上に、あ
す、うはあま、都市の外輪は、
のく、めく、し、^たた、さ、^のの、あ、い、あ、

生活のためには衣食住、医療、教育など
 最低限のものは必要である。そのためには、
 他の方々の人々に協力を求める必要がある。
 自分一人ではできないことを、他人と協力して
 達成させるのである。主として、このように
 考えることは、現代社会において非常に重要
 なことである。他の人々とは異なる、独自の
 価値観や考え方をもち、それを表現し、共有
 することによって、社会全体の発展に貢献する
 ことができる。これは、個人の自由と責任を重
 視する文化であり、多様性を尊重する姿勢が
 求められる。

けあつたに他の事柄に上振下はあ
といふは常の生活の常のみに他
行く事は強ひたし自らの事柄
成つて見えて居る。

何れに役所へ行く事柄の外
に上振下といふ。何れかの事柄

には常の事柄を求め居る。はあ

中をえたいとくれいとは事柄

外へはなからいふ。故に生活

事柄に(3)何れか人の生活は

わたい、
(今日に於ける)

然れども五つの事柄から見て

又
 又、主人は日常生活の必要のため
 に、部屋も、菓子、燕より余り遠く
 へ大抵、うは出まのなへてある。

の地点に役所を移す。甲の位置
には、果敢に、この中程に位置する
に、西の方角に、果敢に（国）
を移す。乙は、何れ
の場所か。丙は、何れ
の場所か。丁は、何れ
の場所か。戊は、何れ
の場所か。己は、何れ
の場所か。庚は、何れ
の場所か。辛は、何れ
の場所か。壬は、何れ
の場所か。癸は、何れ
の場所か。

[illegible]

都下の
和号

都市と農村の別

12
本巻の
海に

市々田村の別
道の節々もつ

戦後の外部が、そのまゝ、都市の
 ありかゝるといふ見方は、都市が一つの機
 能として統一性があることを予想してはな
 い。古時代の都市にはかくの如き素へかゝ
 ちてあると見れば、むしろ近代的都市
 は素としてある。意味で、社会的統一
 性といふわけである。これは間違である。
 又、そのまゝは都市と村落を共に
 考えるべきと考へてある。そこには
 都市と村落を区別づけようとする
 根拠を求めない。

※

ここにゆいおとあはおのちのちと
すうきとあ。

本来都市と非都市と区別つけ

られ、^{は常に}命令の都市とは異質的

に^{は常に}都市を意味してゐる。また

人間の生活様式として^{都市的}は都市か

おのちの外にはあつてゐないからあ

げに市域決定の方法として^{都市的}な

へいふ方法の中には都市と非

都市の境界を区別するが目標と

してゐたものが多い。

一、職場の都市、新地

一、地債、農地

一、文化の絶縁

+

の
記
号

（七）
結果の市域決定の手法は果敢
と何かの方向によつて決定せんとす
る方法と果敢の二類型である。

新市は、お隣の文化の乳牛を色んな
お宝としてとって、都市の足
手洗いをせんとす。方々であらう。

海定

と云ふことがあつた。それ故に
吾人の清和も亦宋の嘉祐
に因るもの次に持茂と都多
の文の時代によつて又別の意
義に因るものになつてゐる。

人に物をばよきものなり
よきものなり

10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

然し
杜鰐
の
部
の
位
号
を
同
じ

て、
あ、
と、
共、
に、
都、
市、
と、
他、
の、
都、
市、

この境界を以て
西回して

ちのちには方々

是つ都府と持渡の境界に

二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

後市の区域決定は、
市界を以て、

打落の境
界に定
められ
た

一 職等の特権によつて都市と村との境

界王兄室人として方任は豊後人に

[illegible]

(6) 都市の文化型との連続はさうに都市の連続と解したのか。ああすると、
これは恐らく都市文化型において連
続して居るであらうが、一般の都市とい
ふところからいへば、あうか。

卷之七

河

抱す。都市は都市をなすために同一
 性質をもち、他の独立した
 存在ではない。自己完結して一つの部
 市となるべきものである。然るに都市
 と地方の間に境界がある、これは都市
 と都市との間に境界はない。左
 いものか。甲府の都市の間に
 ような都市の境界を定めようとする
 者へは、市の如き都市の独立性を
 認めない者へを念にいさす。
 先済文化によつて農村と都市の境界
 を定めようとする者は都市の性質

井

此の自然には社会意識内容
 の相互制約の体系的構造をも
 含む。

[illegible]

最下は生活協同作の節、その外は調
査項目の如きか来り。

の
考
案

通す。あつたを強いた次に、
東京の二乳形である。都市は
市の別、ゆるぎなく市域が決定する。

一、（一） 市界の拡大は、市域の拡大を意味する。市界の拡大は、市域の拡大を意味する。市界の拡大は、市域の拡大を意味する。

ぬふ。なほ、都市を構成するに
 民の階級は人の都市を形成するに

16
 果しつゝ

い
た
は
近
に
二
の
部
市
に
は

せしむる外に累一の部を以て。

芥子園畫傳

13

都市の政治的統一

(政治)

(行政)

都市は、政治的統一の中、行政的地域

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

行政の都市は、行政の都市に政治的統一

聖
の教育の目的は、
心身を共に育てる

14 教育の目的は、心身を共に育てる

私の住居地には、
私に先住するもの

は子供は国民として、
その教育を

受けようとするが、
一定の基準を

もってこれをいへるが、
これは子供は

皆一様に一定の教育を
受けるべき

の外国の教育に
よって受けるべき

と私は思ふが、
これは多分、

子供にかゝる教育を
いふのは

その家庭と
関係がある

からである。子供の
生活環境は

異なるが、
その区域に

よって異なる

子供は都市外の生活の中へ成長
 す。一口に都市外の生活と云ふ
 方にも、又、可成り多岐にわた
 り、様々である。

△
多数の人々、密居して生活し、都市に日常生活の
紙幣や貨幣のみの流通なり。一日も欠くべからず
あり。密居して都市にのみ生活する人々、
大昔より政治的力があつたところ。改良の能力
によりしうはあつた。ルシウ政治は必要と認められ。

イ
ホト